

特集：本シェルジュ6.0——ビジネスのさまざまな悩みにお応えします

第4章 未知の商品に戸惑う 新任プロジェクトリーダーへ ——ロボットと自分の可能性を信じて



野口 栄美

東京都中小企業診断士協会／徳島県中小企業診断士会

まいったな。“頭を抱える”とは、こういうことだろうか…。

会社からの帰り道、南理子は混乱している頭を抱えながら、雨の中を歩く。

なぜ私が？ なぜリーダー？ そして、なぜロボット？

今日、理子は突然上司に呼び出され、新しいプロジェクトのリーダーに任命された。これまでリビング用照明の営業をコツコツとやってきた努力が認められたのか、と喜んだのも束の間、プロジェクトの内容は新しいロボットの企画だった。

どうして照明からいきなりロボットなんだろう。しかも、文系の私が、なぜロボットの企画のリーダーなのか、さっぱりわからない。上司は「君にならできる」と言ってくれたけれど、まったく自信がない。

そもそも、ロボットに関する知識がない。ロボットと言えば、漫画のドラえもんとか？最近、スマホのCMによく出てくるのもロボットだったかしら？ 興味がなかったので、あまり気にしてもなかった。

混乱する頭のままで家に帰るのもいやだし、雨もひどくなってきたので、どこかで落ち着こう。カフェでコーヒーでも飲もうかな。最近見つけたカフェに行ってみよう…。

「いらっしゃいませ。本シェルジュカフェへ、ようこそ」

初めて入った店だった。ほかに客はいない。1人だったこともあって、理子は気軽にカウ

ンター席に座り、荷物を隣に置いてあたりを見渡していた。すると、マスターが微笑みながらやってきた。

「ご注文はお決まりですか？」

理子は、混乱した頭を落ち着かせようと尋ねた。

「少し落ち着きたいので、温かくて甘いものはありますか？」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

マスターは店の奥に入っていく、しばらくすると、「お待たせいたしました」と1冊の本を持ってきた。

理子はどうして本を渡されたのかわからず、聞こうとしたが、すでにマスターは背を向けて店の奥に歩き出していた。

すぐにメニューを持ってくるだろう、と思いつつ本の表紙を見ると、「ロボットのしくみ」というタイトルだった。「あっ！」と思った理子は、勢いよく本をめくった。

1. ロボットとは何か？

ロボットという言葉はよく聞くけれど、何をロボットと呼ぶのだろう。人型のものをロボットというのかしら？ そもそも、それがわからなければ、何も考えられない。

本を開くと、まずはロボットの分類が目に入った。

カラー版 徹底図解 ロボットのしくみ
人間のために働き、人間の友でもある
「ロボット」のすべて



富永 靖弘 著
新星出版社編集部
A5判 224頁
本体 1,500円+税

精密なイラストと豊富な写真を使い、オールカラーで徹底的に図解。最先端の二足歩行ロボットや、工場・危険な場所・介護の現場などで働くロボットたちはもちろん、アニメに登場するロボット、人気のホビーロボットなども紹介。公益社団法人日本図書館協会選定図書。

ロボットを大別

分類例	例
【ヒューマノイド型】 人間に似せて作られたタイプ	・二足歩行ロボット ・ホビーロボット
【機械型】 形にこだわらない機能優先タイプ	・産業用ロボット ・調理ロボット ・海洋調査用ロボット ・宇宙検査用ロボット

どうやら、ロボットにもさまざまな種類があるらしい。ロボットを大まかに定義すると、「人の代わりに自立（自律）的に作業を行う装置」ということのようなのだ。たくさんロボットがあることはわかったけれど、では、何のためにロボットを使うのかしら？

ロボットの役割

活躍シーン	ロボットの役割
産業において	・労働力の安定化 ・品質の安定化 ・人件費の抑制
研究において	・人体に危険な環境での作業 ・精密なデータの取得 ・実験体としての存在

医療・介護において	・不足する人材を補う ・人間の能力の補完 ・精密作業のサポート
家事において	・家事の代行 ・重量物の運搬 ・環境の安定化
軍事において	・不足する人材を補う ・危険な環境での作業 ・重量物の運搬

ロボットの特徴は、判断を伴う作業を安定して行えることらしい。常に一定の行動力を有し、再現性があり、正確に動く。この能力は人間ではなく、人間の作業をサポートするのに非常に適しているようだ。

そして、現在は産業用ロボットが工場で活躍しており、「キツイ・危険・汚い」という3K仕事から人間を解放してくれている。人間が眠っている深夜でも関係なく働くことができ、機械に比べて多機能で、市場の変化にも柔軟に対応できる。ロボットって、随分活躍しているんだなあ…。

理子は、ロボットの基礎知識の章を一気に読み終えた。顔を上げると、少し離れた所でマスターが微笑んでいる。

「飲み物をオーダーしてもいいですか？」と尋ねると、マスターは静かに話し始めた。

「当店は本シェルジュカフェですので、お客様には本をお出ししております。その本を読んでみて、いかがでしたか？ 少しは混乱が収まりましたか？ 後半には、新時代におけるロボットの活躍や、ロボット技術のことも書かれています。ロボットの文化や歴史についても書かれていますので、ロボットへの親しみが増すかもしれませんよ」

優しい声でそう促され、理子はまたページをめくった。

新時代のロボットとしては、ヒューマノイドロボットのほかにも、さまざまなロボットの活躍が期待されているようだ。ロボット技術についても、素人にもわかりやすく書いてくれていて、楽しく読める。

もっとも興味を惹かれたのは、暮らしとロボットの章。私がいつもお客様に提案している場であるリビングにおいても、家庭用の自動清掃ロボットのほか、さまざまなロボットの活躍が期待できるようだ。

暮らしとロボット

- ・自動清掃ロボット
- ・コミュニケーションロボット
- ・メンタルコミットロボット
- ・医療ロボット
- ・介護ロボット
- ・食事支援ロボット
- ・調理ロボット
- ・ホビーロボット
- ・ロボットカー など

何だか思っていたよりも面白いかもしれない。でも、さまざまなロボットがあるのはわかっただけけれど、私は何をどうすればいいのだろう…。

本を閉じて悩んでいると、マスターが近づいてきて、もう1冊の本を差し出してきた。

「こちらも読んでみてはいかがですか？」

2. 幸せな技術で世界を変える

マスターはゆっくりと話し出した。

「この本は、中学生のときに『一生、車椅子での生活だ』と宣告を受けた、あるロボット博士が書いた本です。彼は奇跡的に病気が治ったのですが、ロボットの勉強をすることで、『人の幸せのために役立つ技術を後世に残すことができるはずだ。自分の手で人々が幸せになれる未来を作る！』と15歳のときに心に決めたのです。そして現在、そのとおりに突き進んでいる彼のロボットに対する思いが書かれています」

「何だかロボット博士だなんて、私とはまったく違う世界の人のようですね。きっと難しいことが書かれているのでは？」

不可能は、可能になる 「一生、車椅子」の宣告を受けたロボット研究者の挑戦



古田 貴之 著
PHP 研究所
四六判 205頁
本体 1,400円+税

「余命8年」の難病から奇跡の回復を遂げたロボット研究者の、「不自由をなくす未来社会の実現」に向けた感動ドキュメント。

「彼が伝えたいことは、ロボット技術の内容ではなく、ロボットを活用して社会から不自由をなくしたいという思いです。多くの分野で『不自由が自由になる』ことを目指しています。そして、重要なのは現場のニーズに耳を傾け、そこで使ってもらえるロボットを作り出すことだと書いています」

「ロボットで、不自由が自由になるのでしょうか？ 自分の生活とロボットは、いまはあまり関係がないように思えますが…」

「いまの日本において、環境問題や少子高齢化が加速していることはご存じですね？ その解決にもロボットは活躍できます。そして、あなたが携わっているリビングの仕事でも、ロボットが活躍できるんですよ」

「たしかに、そう書かれていましたね。でも、まだ何かピンとこないんです」

「ひょっとして、あなたはロボット以外にも何かを恐れていませんか？」

理子は思わずビクッとした。凶星だった。

「えっ…はい。実は今日、ロボットのプロジェクトリーダーに任命されたのですが、自分にリーダーが務まるか不安なんです…」

マスターは優しくこう言った。

「自分の思いしだいで、不可能は可能になると書かれていますよ」

理子はページをめくった。ロボットの本当とばかり思っていたが、書かれているメッセージは、いまの理子の心に響くものがあった。

- ・「やりたい」という気持ちを動きに変換できるのがロボット技術
- ・ピンチは成長できるチャンス。自分が進化できるチャンス
- ・「どうしたらできるか」をひたすら考える
- ・未来を作る仕事

理子は、いまの自分の置かれた状況はピンチだと思っていたけれど、実は大きなチャンスなのかもしれない、と思い始めた。そして、怖がっていたリーダーの任務に対しても、心に響くメッセージがあった。

- ・人生の変化の鍵は、結局、人との出会いにある
- ・チームとして目的に邁進することが「成果を残すための本質」である
- ・リーダーシップとは無縁だったはずの自分が、いつの間にかチーム全体のことを考えるように
- ・1人ひとりの持っている才能に気づくと、こちらも活かしてあげたいと思うようになる
- ・チームメンバーのつながり、互いの「信頼」と「情」により、「1+1=3以上」に深まっていくものだ

ロボットやプロジェクトリーダーへの抵抗や怖さが薄れ、硬さがとれてきた。そんな理子に、マスターはさらに先を読むように促した。

- ・地球環境と調和しながら、少子高齢社会を考慮に入れつつ、それを最先端の技術で解決する
- ・「住宅」、「移動手段」、「街」へのロボット技術の導入
- ・住民は自分がロボットハウスに住んでいると意識することなく、快適に生活できるように
- ・ロボット技術をどう使うかということは、ロボットの専門家にはわからない。

- 各ジャンルに精通しているそれぞれの企業に考えてもらうのがベスト
- ・従来の手法にとらわれず、利用シーンを徹底調査すれば、ロボット製品化の道は必ず開ける
- ・「ロボット技術で社会全体が幸せになる」ための努力を、人生を懸けて徹底的に続けようと覚悟しています。「不可能は、可能になる」と信じて—

最後まで読み終えた理子は頭がすっきりし、エネルギーが湧き出る感じがした。そんな理子に、マスターが優しく話しかけた。

「表情が明るくなりましたね」

「はい。私がいままで頑張ってきた、住む人のニーズに沿ったりリビング照明の提案も、ロボット開発や企画に活かせるかもしれません。自分が目指していた人々が豊かに快適に過ごせる生活の手助けが、ロボットを通じてできるみたいです!」

「それは素敵ですね。あなたなら、きっとできますよ」

「はい。おかげで力が湧いてきました。素敵な本と時間をありがとうございました!」

3. ピンチをチャンスに変える

「ピンチをチャンスに変える」ことに成功すれば、日本の未来は明るくなる。

理子は店の外に出て、そう思った。

そうだ。私もこのロボットのプロジェクトのリーダーとなることを、ピンチではなくチャンスだと思って、ロボットにかかわっていかう。日本の未来を変える素敵なロボットと仲間たちに出会えることを期待して…。

野口 栄美

(のぐち えみ)

港産業株式会社勤務。昨年度よりスマートエネルギー部を立ち上げ、省エネ、安全・災害対策、新エネルギーに注力する。2015年度よりロボット課を新設し、人と共存するロボットの展開を図っている。

